市史編さん便り

第 25 号 2021 年 2 月 2 日 (火)発行 土佐清水市教育委員会生涯学習課 市史編さん室

「市史執筆のブレイクタイム(21)」 濱田又四郎(1813―1905)

市史編集委員長 田村公利

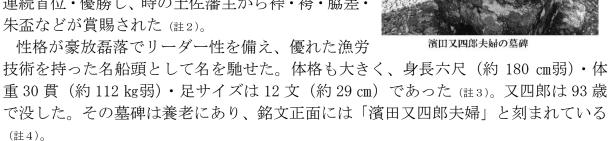
今日は、近世末から明治末までを生き、鼻前カツオ漁の盛期に「一本釣りの神様」 尊敬され、その勝れた漁労技術で長年船頭として活躍した養老浦・濱田又四郎につい て取り上げたい。

又四郎は、養老浦漁師・浜田 藤兵衛の長男として文化 10年 (1813)、近世末カツオ漁で栄 えた養老浦に生まれた。父が漁 師であった関係から子どもの 頃よりカツオ船に乗り、沿岸で カツオ釣りに親しみ、その漁労 技術を磨いてきた。漁労技術は 天性の才能があり、10代中頃、 宇佐浦増木屋が養老浦に出張 を置き、カツオ漁をしたときに 船員として雇用されて高評価 を得た(註1)。



昭和初め頃の養老浦

その後、三崎浦・橋屋が養老浦に出張を置き、カ ツオ漁を行った際には、若干 19 歳で船頭に抜擢さ れた。以来 20 数年間、40 歳代まで船頭として活躍 し、その漁労技術は神技と言われた。養老浦を含む 伊佐・松尾・大浜・中浜・清水・越の7ヶ浦所属の カツオ船の中で水揚げ尾数が船頭又四郎の率いる カツオ船がトップであり、出漁ごとに多い時には、 3,000~4,000 尾を釣り上げた。清水浦分一役所から 褒賞を受け、その証として度々大漁旗を授与した。 また、土佐湾沿岸域の浦々でもカツオ漁獲高が3年 連続首位・優勝し、時の土佐藩主から裃・袴・脇差・





- (註1) 中山進『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980年、869—871頁。
- (註2) ~ (註4) (註1) に同じ。

◎今後の市史編さんの流れ(~来年度10月初旬)

一次原稿は、一応来年度 7 月末までを目標に完了させてください(最終期限は 10 月初旬迄です)。委託業者(株式会社ぎょうせい四国支社)には、少ない頁数で提出すると非効率的であるばかりか、かえって煩雑になりますので、担当章の執筆が完了次第、まとめて紙ベースで提出することにします。 $(1)\sim(6)$ にその流れをまとめましたので、ご確認ください。

- (1)一次原稿提出を2月末までに市史編さん室へ紙ベースにて提出。
- (2)提出した <u>一次原稿</u>は市史編さん室で預かり簡単な校正(校正期間:2月末~3月中旬)。 市史編さん室で原稿を貯め、章が完成したら→委託業者に紙ベースで提出。
- (3)その後一次原稿は、委託業者に提出し、5月中に校正され、各編集委員に返却。
- (4)(3)の返却原稿を手直しして、市史編さん室を経由して委託業者に二次原稿を提出。
- (5)二次原稿を手直し、委託業者はゲラ刷りを作成。
- (6)作成したゲラ刷りを全編集委員及び監修でチェックする。

市史執筆原稿の確認事項

年度末も迫り、市史執筆も佳境でご多忙のことと存じます。これまで市史編集委員会などでも確認してきた執筆細則の基本点をここでもう一度、確認をさせていただきたいと思います。参考・引用文献は各節ごとに末尾に列挙してください。文中の補足説明が必要な場合は、文中に註(番号数字)を入れ、文末にそれを列挙してください。写真や図表は、資料として通し、キャプションを付け、通し番号を付けてください。例えば、資料 6-7-1 は、6 章 7 節の 1 番目の資料を意味します。また、年号を記載する場合は、和暦(西暦)としてください。例えば、「昭和 40 年(1965)」のような表記になります。



イベント情報

「令和3年公民館サークル文化展」2月 20~23 日

 $2/20\sim22$ (9:00 $\sim17:00$), 2/23 (9:00 $\sim13:00$)

本年度は、コロナ禍もあり参加サークルが 12 団体になりましたが、基本的なコロナ感染対策を講じたうえで開催します。

参加団体の土佐清水市郷土史同好会は、土佐清水市教育委員会の取り組む旧大津 小学校の学校史資料を整理・保存活動を支援してきました。今回はその成果を踏ま えて「旧大津小学校展」と題して企画展示を行います。是非ご覧ください。

編集後記 "母に誓った『新市史』編さん"

私こと。今月12日、母の1周忌を迎えようとしている。亡くなる3ヶ月前のこと、母は正月を間近に脳梗塞で入退院を繰り返し、やっと自宅に帰ってきた。自分の命が風前であることを私に漏らした。 私は「『新市史』があと3年で完遂するので、何とかそれまで生きていてほしい」ことを母に伝えた。 そして、「完遂した『新市史』を手にとって見てほしい」と言葉を加えた。

仕事に行く前と、帰ったときに、母の介護用ベッドに行き、毎日声をかけた。日ごとに体力がなくなっていく母であったが、あるとき「私には心に決めちょうことがある」と口角を引き締め、気力でそれを私に何回も繰り返し伝えようとした。

母は心に決めている内容を言葉に出して言わなかったし、私も直接聞かなかった。しかし、親子である。母が私に伝えたかったことを私は分っていた。それはきっと「市史編さんが完成するまで私は生きる、なんとしても生きたい!」という強い決意と誓願の思いであったに違いない。母は、朝夕私に会う度に、この言葉を繰り返した。最後の気力をふりしぼった、気迫のこもる言葉であった。「一人息子の責任ある仕事を見届ける」という母の命の時間との壮絶な戦いであり、その覚悟の発露でもあった。その烈々たる言葉は、今でも私の耳朶に焼き付いて離れない。

令和2年度も間もなく終了し、編さん事業も来年度からいよいよ後半戦となる。コロナ禍の混迷した情勢ではあるが、課題であった中世山城調査、戦争遺跡調査も精力的に進められている。地元郷土史同好会の皆様のご尽力や地域の方々の応援もあって力強い。こうした皆様のおかげで何とか年度中に調査が完了しそうである。

また、年度末にかけて各執筆委員のラストスパートが見られ、原稿の提出枚数も少しずつ増えてきた。総頁数は3分の1に縮小され(2000 頁余り \Rightarrow 720 頁余り)、コンパクトにはなったが、改訂までの40年余りの研究成果と新たな知見と切り口を加えた『新市史』が令和4年度末には誕生する。

『新市史』には、これに関わるすべての人々の熱い思いが込められている。そう思うと胸にこみ上げてくるものがある。

「市史編さん便り 22 号」で紹介した『旧市史』の調査に関わった谷口保之さん、 市史改訂の礎を築いた故中村春利元郷土史同好会会長、 監修な地くか引き受けいながいなせ、第四和黒三県立仏財家議会長、第76

監修を快くお引き受けいただいた故前田和男元県文化財審議会長、等々。

私たちは、ご尽力いただいたすべての方々の熱い思いを胸に、市民の期待に応えることができる「市 民のための基軸書(『新市史』)」を精力的につくりあげる責任と使命がある。

(市史編集委員長 田村公利 記)